

ては面白くねえどうだい向い山のてっぺんから白ごと落し、先に餅に追いついた方が全部食べることにしつぺえでねいか。」蛙はちつともいやな顔もせず「よかんべえ。」と賛成した。二匹はエツチラオツチラようよう白を山の頂上に運び上げ一、二の三でころがり落した。白は反動をつけ木も草も押し倒しながらころがり落ちていった。猿はしてやったり、餅は全部「おれのものだ。」とばかり、白の後を夢中になって追いかけてゆく。蛙はそのあとをノソリノソリとついていった。

頂上から少し下ったつつじの株に廻るハズミでとび出した餅がくついていたのである。蛙は大喜び、ペタリ、ペタリ目を白黒させながら食べていた。沢までころがり落ちた白には一かけらの餅もついていなかったのである。ガツカリした猿はアチコチと探しながら登ってくると蛙はゆうゆうと腰をおちつけ、さもうまそうに餅を食べている。猿はもう腹がペコペコである「蛙どんや、おれにも少し食わせてくれねいか。」蛙は見向きもしないで「猿どんやあんたはな、一度も仕事もしねいでこのわしにばかりさせただぞ、それにこんどは餅をついたら、わしには食わせねえいつもりなんだな、神様はチャント見ていらっしやって、このわしだけよく働いたということでお授け下さったんだ。づるいなまけものあんたには一かけらだつてやれねいぞっ。」

猿は赤い顔を更に真赤にして平あやまりにあやまったとき。